# 9月23日(金)

# 講義室(1E102)

#### F-01 15:00~17:00

アジアにおけるツキノワグマの保全と動物福祉:クマおよびクマパーツの違法な商取引と クマ胆汁採取の実態

○下鶴 倫人¹, Bando, Monica²(¹北海道大学, ²Washington State University)

# 講義室(1E203)

#### F-02 15:00~17:00

ニホンジカ低密度実現・維持に向けた課題 その2

○高橋 裕史¹, 松浦 友紀子², 伊吾田 宏正³, 池田 敬⁴, 東谷 宗光⁵(¹森林総研関西,²森林総研北海道,³酪農学園大,⁴国総研,⁵エゾシカ協会)

# 講義室(1E303)

## F-03 15:00~17:00

サル部会企画:ニホンザルの地域個体群を検討する―保護管理の単位・基準策定にむけて-

○鈴木 克哉<sup>1</sup>, 江成 広斗<sup>2</sup>, 宇野 壮春<sup>3</sup>, 清野 紘典<sup>4</sup>, 滝口 正明<sup>5</sup>, 森光 由樹<sup>6</sup>, 山端 直人<sup>7</sup>(<sup>1</sup>特定非営利活動法人 里地里山問題研究所, <sup>2</sup>山形大学農学部, <sup>3</sup>合同会 社東北野生動物保護管理センター, <sup>4</sup>株式会社野生動物保護管理事務所, <sup>5</sup>一般財団法 人自然環境研究センター, <sup>6</sup>兵庫県立大学自然・環境科学研究所, <sup>7</sup>三重県農業研究所)

# 講義室(1D201)

#### F-04 15:00~17:00

都市における食肉目動物研究

○斎藤 昌幸, 金子 弥生(東京農工大学)

## 講義室(1E102)

## F-05 17:00~19:00

保全生態学は、四国のクマを救えるか?

○大井 徹 ⁴, 山﨑 晃司 ², 谷地森 秀二 ¹, 山田 孝樹 ¹, Onuma, Manabu³(¹四国自然 史科学研究センター, ²東京農業大学, ³国立環境研究所, ⁴石川県立大学)

# 自由集会

# 講義室(1E203)

# F-06 17:00~19:00

カモシカ研究と保全論議の復興をめざして

○常田 邦彦¹, 三浦 貴弘¹, 奥村 栄朗², 岸元 良輔³, 三浦 慎悟⁴, 小池 伸介⁵ (¹一般財団法人自然環境研究センター,²森林総合研究所四国支所,³NPO 法人信州ツキノワグマ研究会,⁴早稲田大学,⁵東京農工大学)

# 講義室(1E303)

## F-07 17:00~19:00

申年記念企画:若手サル学者によるニホンザルの行動研究 川添 達朗<sup>1</sup>,澤田 晶子<sup>2</sup>,上野 将敬<sup>3</sup>,勝 野吏子<sup>3</sup>,○中川 尚史<sup>1</sup>(<sup>1</sup>京都大学・理学研究科,<sup>2</sup>京都大学・霊長類研究所,<sup>3</sup>大阪大学・人間科学研究科)

# 講義室(1D201)

## F-08 17:00~19:00

鰭脚類の食物消費量算出に向けて

○服部 薫¹,後藤 陽子²,田村 力³,小林 万里⁴,増渕 隆仁⁴,羽根田 貴行⁴, 金治 佑⁵,大泉 宏⁶(¹水産機構・北水研,²道総研・稚内水試,³日鯨研,⁴東農大・アク アバイオ,⁵水産機構・国際水研,⁶東海大・海洋)

# 9月24日(土)

# 講義室(1E102)

## F-09 17:00~19:00

野生動物の個体数推定の原理と実装~特にベイズ法に着目して~

○飯島 勇人¹,深澤 圭太²,高木 俊³(¹山梨県森林研,²国環研,³兵庫県立大/兵庫県森林動物研究セ)

## 講義室(1E203)

#### F-10 17:00~19:00

記載のすゝめー奇形と破格からみる生物学ー

○郡司 芽久¹, 栗原 望², 松尾 大輝³(¹東京大学,²宇都宮大学,³山口大学)

# 講義室(1E303)

#### F-11 17:00~19:00

熱帯アジアでフィールドワーク! ~ マレーバク、ヤマアラシ、ジャコウネコ、オランウータンの謎に迫る ~

○松林 尚志<sup>1</sup>, 中島 啓裕<sup>2</sup>, 田和 優子<sup>3</sup>, 松川 あおい<sup>3</sup>, 中林 雅<sup>4</sup>, 田島 知之<sup>5</sup> (<sup>1</sup>東京農業大学農学部, <sup>2</sup>日本大学生物資源科学部, <sup>3</sup>京都大学野生動物研究センター, <sup>4</sup>琉球大学理工学研究科, <sup>5</sup>京都大学理学研究科)

# 講義室(1D201)

## F-12 17:00~19:00

出産・育児と研究の両立を目指して~男女の研究者の体験談を聞き、今後の取り組みを 考える~

○久世 濃子<sup>1,2</sup>, 小坂井 千夏<sup>3</sup>, 久保(尾崎) 麦野<sup>4</sup>, 久保 泰<sup>5</sup>, 下岡 ゆき子<sup>6</sup>, 高槻 成紀<sup>7</sup>, 椎野 若菜<sup>8</sup>, 酒井 麻衣<sup>9</sup>(¹国立科学博物館, ²日本学術振興会, ³農研機構・中央農研, ⁴東京大学新領域創成科学研究科, ⁵東京大学総合研究博物館, <sup>6</sup>帝京科学大学, <sup>7</sup>麻布大学, <sup>8</sup>東京外国語大学, <sup>9</sup>近畿大学)

## 講義室(1D204)

## F-13 17:00~19:00

これからの野生哺乳類管理 ―2015 年度奨励賞受賞者に聞く

〇横畑 泰志¹, 江成 広斗², 亘 悠哉³, 梶 光一⁴(¹富山大学大学院理工学研究部,²山形大学農学部,³国立研究開発法人森林総合研究所野生動物研究領域,⁴東京農工大学)

# 自由集会

# 講義室(1E102)

## F-14 19:00~21:00

若手研究者による多様な研究紹介~将来を見据えた活発な交流をめざして~

○TAKASHI IKEDA¹, YUKI MATSUMOTO², KENTA UCHIDA³(¹国土技術政策総合研究所,²総合研究大学院大学,³北海道大学)

# 講義室(1E203)

## F-15 19:00~21:00

哺乳類の「食」を通じた他種への影響

○YAMATO TSUJI<sup>1</sup>, ATSUSHI NAKAMOTO<sup>2</sup>(<sup>1</sup>京都大学・霊長類研究所, <sup>2</sup>琉球大学・大学教育センター)

# 講義室(1E303)

#### F-16 19:00~21:00

野ネズミの生態学-New approaches develop novel fields-

○坂本 信介¹, 島田 卓哉², 齊藤 隆³(¹宮崎大・農,²森林総研・東北,³北大・フィール ド科学センター)

# 講義室(1D201)

# F-17 19:00~21:00

ビックデータ「モニタリングサイト 1000 里地調査」の可能性 ~全国の市民によるセンサーカメラ調査で何がわかるか~

〇青木 雄司 $^1$ , 足立 高行 $^2$ , 安藤 元一 $^3$ ( $^1$ 公益財団法人 神奈川県公園協会, $^2$ 応用 生態技術研究所, $^3$ ヤマザキ学園大学)

# 講義室(1D204)

## F-18 19:00~21:00

# 骨盤!

〇福井 大<sup>1</sup>, 五十嵐 由里子<sup>2</sup>, 田島 木綿子<sup>3</sup>, 久世 濃子<sup>3,4</sup>, 森 健人<sup>3</sup>, 川田 伸一郎<sup>3</sup> (<sup>1</sup>東京大学, <sup>2</sup>日大松戸歯学部, <sup>3</sup>国立科学博物館, <sup>4</sup>日本学術振興会)

F-01

アジアにおけるツキノワグマの保全と動物福祉: クマおよびクマパーツの違法な商取引とクマ胆汁採取の実態 〇下鶴 倫人 ¹, Bando, Monica²

(<sup>1</sup>北海道大学, <sup>2</sup>Washington State University)

Asiatic black bears are listed under appendix I of CITES and as vulnerable by IUCN yet they are the predominant species targeted and farmed for bile throughout Asia. Animal welfare charity Animals Asia has rescued over 570 bears from the bear bile industry in China and Vietnam and estimates over 10,000 bears are currently farmed in China alone however accurate free-ranging Asiatic black bear population estimates are lacking throughout most of their range. Bear bile farming is a tremendous animal welfare and bear conservation issue. Bears on bile farms experience numerous health issues including, but not limited to, malnutrition, hyperkeratosis of the pads, cholecystitis, and severe dental disease. Upon rescue, bears require extensive mental, behavioral and physical rehabilitation. From a conservation standpoint, Asiatic black bears continue to be poached to stock bile farms and/or supply international demand for bear parts. The wildlife trade monitoring network, TRAFFIC, has identified that illegal trafficking of bear parts will continue until improved legislation, effective enforcement and corruption are addressed in multiple countries throughout southeast Asia.

F-02

ニホンジカ低密度実現・維持に向けた課題 その2 〇高橋 裕史<sup>1</sup>, 松浦 友紀子<sup>2</sup>, 伊吾田 宏正<sup>3</sup>, 池田 敬<sup>4</sup>, 東谷 宗光<sup>5</sup> (<sup>1</sup>森林総研関西, <sup>2</sup>森林総研北海道, <sup>3</sup>酪農学園大, <sup>4</sup>国総研, <sup>5</sup>エゾシカ協会)

各地で喫緊の課題となっているニホンジカ生息密度低減に際して、局所的空間スケールに限れば暫定的な目標生息密度に達しつつある地域が出てきてはいるものの、未だ本来の目的(すなわち天然更新の回復や生物多様性の復元など)までに至った事例に乏しいのが現状である。また東北・北陸地方など広域スケールでの分布拡大・高密度化の抑制が重大な課題となってきている。目的の達成と持続に向けては、さらなる技術的な課題や、シカの生物学的な機能応答などの問題にも直面するようになってきた。本集会では、これらの事例を紹介いただき、低密度実現・維持に向けた課題を共有・克服する糧としたい。

小林喬子 (一般財団法人自然環境研究センター)「低密度化とその維持にあたっての課題と試み:大台ヶ原の 事例」

堀野眞一(森林総研)「極低密度地域における現状と課題」

松浦友紀子「低密度化に対するシカ個体群の反応: 体サイズと繁殖特性の改善」

コメンテーター 浅田正彦(合同会社 AMAC)「遅滞相管理のその後と低密度実現に向けた課題」

F-03

サル部会企画: ニホンザルの地域個体群を検討する—保護管理の単位・基準策定にむけてー 〇鈴木 克哉<sup>1</sup>, 江成 広斗<sup>2</sup>, 宇野 壮春<sup>3</sup>, 清野 紘典<sup>4</sup>, 滝口 正明<sup>5</sup>, 森光 由樹<sup>6</sup>, 山端 直人<sup>7</sup> (<sup>1</sup>特定非営利活動法人 里地里山問題研究所, <sup>2</sup>山形大学農学部, <sup>3</sup>合同会社東北野生動物保護管理センター, <sup>4</sup>株式会社野生動物保護管理事務所, <sup>5</sup>一般財団法人自然環境研究センター, <sup>6</sup>兵庫県立大学自然・環境科学研究所, <sup>7</sup>三重県農業研究所)

近年ニホンザル管理に関する研究がすすめられている。住民主体で行う被害管理の実践的な研究成果のほか、最近では、群れを形成し一定の行動圏をもつニホンザル独自の個体数管理の方法論や、加害レベルを考慮した広域的な管理計画について議論されている。ニホンザル保護管理検討作業部会では以上の考えを整理し、昨年度改訂された環境省の特定計画作成のためのガイドラインにも反映させるなど、ニホンザル地域個体群管理の統合的手法の整理に尽力している。

一方で、ニホンザルの保護をどのように担保するかは積み残された大きな課題として残っている。効率的な管理を行うためにも、保護管理の単位や基準の策定が不可欠であり、本自由集会では、地域個体群成立の歴史性や遺伝的連続性、群れおよび地域個体群の存続可能性を考慮した「単位」と「基準」について検討する。集団遺伝学、個体群生態学の最新の研究成果とともに、保護に対する研究や基準策定が先行しているクマ類の現状と課題もふまえて、保護管理の現場に及ぼす影響を考慮しながら総合的に議論したい。 演者

1. ニホンザル地域個体群の歴史性と遺伝的連続性

川本芳(京都大学霊長類研究所)

- 2. 性・齢構成からみたニホンザル群・地域個体群の存続可能性の評価 岸本康誉・平山寛之・佐伯真美・清野 紘典((株)野生動物保護管理事務所)
- 3. クマ類の保護管理の現状と課題

中川恒祐 ((株)野生動物保護管理事務所)

総合討論

F-04

# 都市における食肉目動物研究 〇斎藤 昌幸,金子 弥生 (東京農工大学)

食肉目は多様な生態・行動を有することが知られており、その多様性は一部の種の都市環境への適応を可能にした。日本においても、東京都心部におけるホンドタヌキ・ハクビシン、札幌市街地におけるキタキツネの生息事例が報告されている。都市生態系において食肉目は上位種として重要であると考えられるが、その生態研究が十分に進んでいるとは言い難い。一方で、ロードキルや家屋侵入といった地域住民と食肉目の軋轢が問題になっている。そのため、都市環境において多角的に食肉目研究が進展することが求められる。本集会では、都市と食肉目の関係について様々な視点で行われた研究事例を紹介し、今後必要な研究の方向性について議論したい

講演 1. 東京都心部の食肉目研究の取り組みー赤坂御用地のタヌキ調査の設計

金子弥生 (農工大・農)

講演 2. 東京周辺における都市化傾度と食肉目動物の分布

斎藤昌幸(農工大・農)

講演 3. 都市食肉目動物の集団遺伝学

増田隆一(北大・理)

講演 4. 道路の哺乳類への生態学的影響と保全技術ー効果検証におけるモニタリングの課題ー

園田陽一((株)地域環境計画)

講演 5. 都市住民の野生生物に対する受容性とその形成要因

保坂哲朗(首都大·都市環境)

コメンテーター:浦口宏二(北海道立衛生研究所)、岸本真弓((株)野生動物保護管理事務所関西分室)、谷川 力(イカリ消毒株式会社(東京都ペストコントロール協会))、福永健司(アスワット代表)

F-05

# 保全生態学は、四国のクマを救えるか?

〇大井 徹<sup>4</sup>, 山﨑 晃司<sup>2</sup>, 谷地森 秀二<sup>1</sup>, 山田 孝樹<sup>1</sup>, Onuma, Manabu<sup>3</sup> (<sup>1</sup>四国自然史科学研究センター, <sup>2</sup>東京農業大学, <sup>3</sup>国立環境研究所, <sup>4</sup>石川県立大学)

四国のツキノワグマの生息数は十数頭から数十頭と推定され、絶滅の恐れが極めて高いと考えられている。 個体群回復のための長期的対策としての生息地の改善、短期的な対策としてのシカ対策、即効的しかし影響が 不可逆的で実施に慎重を期する給餌、補強、域外保全といった保全対策の可能性について 3 人の演者に話題提供していただき、検討する。

演者、演題、講演の要旨は次の通り。

1.四国のクマの現状と生息地改善について 山田孝樹 (四国自然史科学研究センター)

四国のツキノワグマが減少した理由として、生息環境の消失と捕殺による影響が考えられている。現在、捕殺は無いが、生息環境は回復していない。生息地改善の方向性について議論したい。

2.給餌による個体群保全の可能性 山﨑晃司 (東京農業大学)

四国のクマの個体数が回復しない理由が生息環境の質の低下であるなら、給餌も選択肢のひとつだろう。クマ類への個体群回復のため給餌例は、モンゴルでのゴビヒグマがある。給餌のクマおよび地域生態系への影響を検討したい。

3.域外保全と補強による個体群保全の可能性 大沼学 (国立環境研究所)

四国のツキノワグマ個体群に対して「補強」を行う場合には二つの選択肢が考えられる。まず、他の生息地から個体を四国へ導入する方法である。また、飼育下繁殖を行い、繁殖個体を導入するという選択肢もある。これらの方法の実現可能性について議論したい。

F-06

#### カモシカ研究と保全論議の復興をめざして

○常田 邦彦<sup>1</sup>, 三浦 貴弘<sup>1</sup>, 奥村 栄朗<sup>2</sup>, 岸元 良輔<sup>3</sup>, 三浦 慎悟<sup>4</sup>, 小池 伸介<sup>5</sup> (<sup>1</sup>一般財団法人自然環境研究センター, <sup>2</sup>森林総合研究所四国支所, <sup>3</sup>NPO 法人信州ツキノワグマ研究会, <sup>4</sup>早稲田大学, <sup>5</sup>東京農工大学)

1970年代半ばから 1990年代初めにかけて盛んであったカモシカの研究と保全に関する論議は、カモシカ被害問題の沈静化とシカ被害等が社会問題化する中で衰退している.しかし近年全国的にカモシカの生息密度は低下傾向にあり、シカの高密度化が著しい西日本では地域個体群の安定的存続が危ぶまれる事態も生じている.現在のカモシカ保全問題には、①現行の制度(文化財保護行政と鳥獣保護管理行政)が内包する保護管理システム上の問題と、②種間関係や生態系という枠組みの中での保全の在り方、という2つの大きな課題がある.以上の認識に立ち、研究と保全の再活性化のための論議をおこないたい.

趣旨説明 常田邦彦(自然環境研究センター)

カモシカ保護管理の現状と課題 三浦貴弘(自然環境研究センター)

四国のカモシカの危機的状況 奥村栄朗(森林総合研究所四国支所)

資源防衛者としてのカモシカ 岸元良輔(NPO 法人信州ツキノワグマ研究会)

カモシカの個体群動態から見た生活史 三浦慎悟(早稲田大学)

コメント 小池伸介(東京農工大学)

討 論

F-07

申年記念企画:若手サル学者による二ホンザルの行動研究 川添 達朗<sup>1</sup>,澤田 晶子<sup>2</sup>,上野 将敬<sup>3</sup>,勝 野吏子<sup>3</sup>,〇中川 尚史<sup>1</sup> (<sup>1</sup>京都大学・理学研究科,<sup>2</sup>京都大学・霊長類研究所,<sup>3</sup>大阪大学・人間科学研究科)

1949年にニホンザルの野外研究から始まった日本のサル学は、1956年にはプリマーテス研究会という霊長類のみを対象とする実質学会組織を立ち上げた。草創期の中心課題がその生態ではなく、社会や文化であったことも手伝って、他の哺乳類学とは疎遠になっていった。そして2013年、日本霊長類学会との合同大会が初めて実現した。それぞれの学会員にとって刺激のある大会であったと思う。あれから早や3年が経過し、合同学会を知らない会員も出てきている。そこで申年に当たる2016年度大会では、それぞれ異なる調査地でニホンザルの野外研究に従事し、ちょうどこの間に博士号を取得した非会員3名を含めた若手のサル学者4名にご登壇いただく。日本産哺乳類の中で行動観察が比較的容易なニホンザルという対象の特性を活かしつつ、その特性のために数多くの研究がある中で、いかにして自身の研究の独自性を築いていくのかに注目して聞いていただきたい。

- 1. 『キノコ食行動-課題と可能性-』(鹿児島県屋久島):澤田晶子(京大・霊長研)
- 2. 『毛づくろいの行動学-親密さの影響- (仮題)』(岡山県勝山): 上野将敬(阪大・人間科学)
- 3. 『音声による"あいさつ"行動とその発達』(京都府嵐山): 勝野吏子(阪大・人間科学)
- 4. 『島嶼個体群で群れ外オスを追うーグルーピングと社会関係ー』(宮城県金華山島):川添達朗(京大・理)

F-08

## 鰭脚類の食物消費量算出に向けて

○服部 薫¹,後藤 陽子²,田村 カ³,小林 万里⁴,増渕 隆仁⁴,羽根田 貴行⁴,金治 佑⁵,大泉 宏<sup>6</sup> (¹水産機構・北水研,²道総研・稚内水試,³日鯨研,⁴東農大・アクアバイオ,⁵水産機構・国際水研,<sup>6</sup>東海大・海洋)

鰭脚類は海洋生態系の高次捕食者であり、捕食を通じて魚類資源や生態系に大きな影響を与え、北海道周辺では漁業との軋轢が大きな社会問題となっている。鰭脚類による海洋生態系への影響を定量化するためには、彼らの食性や個体数、分布・移動に関する情報が必要である。これらの情報は生態系モデルの構築や気候変動への応答予測などにも貢献する。本集会では、鰭脚類の食物消費量算出に向け、インベントリの作成を念頭に、鯨類における研究事例を紹介し、必要な情報の有無と課題について議論する。

講演

田村力(日鯨研): 鯨類の食物消費量

小林万里・増渕隆仁・羽根田貴行(東農大・アクアバイオ): 定住性鰭脚類の個体数評価と食性 総合討論

鰭脚類の食物消費量における現状と課題

話題提供者:テーマ

金治佑(水産機構・国際水研):安定同位体分析

大泉宏 (東海大・海洋): 代謝率測定によるエネルギー要求量の推定

後藤陽子(道総研・稚内水試):トドの食性分析

服部薫(水産機構・北水研):回遊性鰭脚類の個体数評価

F-09

# 野生動物の個体数推定の原理と実装~特にベイズ法に着目して~ 〇飯島 勇人<sup>1</sup>,深澤 圭太<sup>2</sup>,高木 俊<sup>3</sup> (1山梨県森林研,<sup>2</sup>国環研,<sup>3</sup>兵庫県立大/兵庫県森林動物研究セ)

近年、特定の野生動物種の個体数が減少あるいは過大となり、その管理が課題となっていることから、個体数推定に関する関心が高まっている。野生動物の個体数推定については古くから研究されてきたが、適用できる条件に制約が多いこと、様々な種類のデータを一括して扱えない問題があった。ベイズ法に基づくモデル(以下ベイズモデルとする)は現実に得られるデータの問題点(欠測がある、観測誤差がある、複数種のデータがある等)をある程度考慮することが可能であり、注目が高まっている。しかし、ベイズモデルはモデル構造の自由度が高いこと、必ず必要となる事前分布の設定、実装に特殊なプログラムが必要などの理由から難解とされており、ベイズモデルによる個体数推定は野生動物管理において十分に活用されているとは言い難い。本集会では、ベイズモデルによる個体数推定の原理と解釈、実装方法と実データへの適用例を紹介し、主に初学者を対象にベイズモデルによる個体数推定に関する理解を深めることを目的とする。

#### 講演の構成

「個体数推定法の歴史とベイズモデルの実装例」飯島勇人(山梨県森林研)

「ベイズモデルにおけるパラメータの同定可能性と結果の解釈」深澤圭太(国環研)

「兵庫県におけるシカ個体数推定モデルの再検討」高木俊・三橋弘宗・横山真弓(兵庫県立大/兵庫県森林動物研究セ)

F-10

記載のすゝめー奇形と破格からみる生物学ー 〇郡司 芽久<sup>1</sup>, 栗原 望<sup>2</sup>, 松尾 大輝<sup>3</sup> (1東京大学,<sup>2</sup>宇都宮大学,<sup>3</sup>山口大学)

記載とは、詳細な観察に基づいて生物の形質を正確に記録することであり、自然科学の最も基礎的な作業である。16世紀から20世紀前半にかけては、個々の事例を記載することは極めて重要視され、これらの記載を比較することにより、現在我々がもつ一般的な知見が得られてきた。近年、科学技術の発展により観察方法の幅が広がる一方、目の前の事象を自分の目で捉え、記録する、伝統的な記載研究は減少しつつあるように感じる。しかしながら、特定の研究目的を持たず、事象の全体像を細部まで記す記載研究は、現代もなお思わぬ発見や発想をもたらしてくれるであろう。

本自由集会では、奇形や破格といった「何らかの形態的異常が生じている個体」の記載研究に注目し、記載研究の過去・現在・未来について議論したいと思う。奇形・破格個体の記載は、綿密な考察を伴えば、発生学的な実験を行うことが難しい種における発生や遺伝子に関する貴重な仮説を引き出す端緒となり得る。

今回は、山田格博士(国立科学博物館)にこれまでの奇形や破格個体の記載研究についてご紹介いただき、 関谷伸一博士(新潟県立看護大学)に神経や血管の奇形・破格に関して話題提供をしていただくことを企画した。また、世話人の郡司芽久(東京大学総合研究博物館)は偶蹄類における体軸骨格の形成異常について、栗原望(宇都宮大学)は、スローロリスの体軸骨格形成不全について事例を紹介する。

#### F-11

熱帯アジアでフィールドワーク! ~ マレーバク、ヤマアラシ、ジャコウネコ、オランウータンの謎に迫る ~ 〇松林 尚志 <sup>1</sup>, 中島 啓裕 <sup>2</sup>, 田和 優子 <sup>3</sup>, 松川 あおい <sup>3</sup>, 中林 雅 <sup>4</sup>, 田島 知之 <sup>5</sup>

(<sup>1</sup>東京農業大学農学部,<sup>2</sup>日本大学生物資源科学部,<sup>3</sup>京都大学野生動物研究センター,<sup>4</sup>琉球大学理工学研究科, <sup>5</sup>京都大学理学研究科)

「熱帯雨林で野生動物の研究をしたい」と思う人は、実は意外に多いのではないでしょうか。私たちもそうでした。しかし、気力はあるけど「英語が話せない。現地とのパイプがない。調査経験がない。体力がない。そもそも海外へ行ったことがない」、色んな不安が勝って一歩を踏み出せない、そこの「あなた」。是非、お越し下さい。

本自由集会では、マレーシア(マレー半島とボルネオ島)で、実際に野生動物を観ている大学院生や若手研究者の生の声をお届けします。彼らは、自然も文化も異なる土地で、どうやって現地に馴染み長期調査を行い、どんなことを明らかにしたのか、または明らかにしつつあるのか。日々の生活と調査で大変だった事や楽しかった事を交えながら、熱帯アジアの野生動物研究の最新情報を発表してもらいます。 演者と演題は以下のとおりです。

- ・田和優子(京大・WRC)「画面越しに見た野生のマレーバク」
- ・松川あおい(京大・WRC)「熱帯雨林に棲むヤマアラシを探して」
- ・中林 雅 (琉大・理工)「夜の熱帯雨林で見えたもの」
- ・田島知之(京大・理)「空飛ぶトカゲと森の人」

協賛:東海大学出版部·田志口克己

#### F-12

出産・育児と研究の両立を目指して〜男女の研究者の体験談を聞き、今後の取り組みを考える〜 〇久世 濃子 <sup>1,2</sup>, 小坂井 千夏 <sup>3</sup>, 久保(尾崎) 麦野 <sup>4</sup>, 久保 泰 <sup>5</sup>, 下岡 ゆき子 <sup>6</sup>, 高槻 成紀 <sup>7</sup>, 椎野 若菜 <sup>8</sup>, 酒井 麻衣 <sup>9</sup>

(1国立科学博物館,2日本学術振興会,3農研機構・中央農研,4東京大学新領域創成科学研究科, 5東京大学総合研究博物館,6帝京科学大学,7麻布大学,8東京外国語大学,9近畿大学)

本会でも若手を中心に女性の会員が増えてきたが、中堅以上の会員における女性の比率は高くはない。研究者として仕事に打ち込める(打ち込むべき) $20\sim40$  代は、女性にとっては妊娠・出産・育児が可能な時期と重なる為、研究との両立に困難が伴い、時にはどちらかを諦めざる得ないこともある。また、女性自身の努力だけでなく、家族はもちろん周囲の人の理解やサポートが、両立を可能にするかどうかの大きな分かれ目になる。本集会では、こうしたライフイベントと研究の両立を試みて活動してきた男女の研究者がその経験談を語ると共に、両立を可能にする為の工夫や環境作りについて議論する。

#### <発表者>

- (1) 小坂井千夏(農研機構・中央農研): 学振特別研究員(RPD)の申請・採用過程と、週末婚での育児と研究の両立
- (2) 久保麦野(東大新領域)・久保泰(東大博): 育児と研究の両立を目指す研究者夫婦: 妻の経験、夫の視点
- (3) 下岡ゆき子(帝科大): 私大教員の出産育児とフィールドワークの可能性
- (4) 高槻成紀 (麻布大): 産休代替教員の経験や両立を目指す女性研究者を見てきて思うこと
- (5) 椎野若菜 (東京外大): 子連れでの国内外での学会参加・調査
- (6)酒井麻衣(近畿大):家族でイルカの棲む島へ!伊豆諸島御蔵島でのフィールドワーク

F-13

# これからの野生哺乳類管理 —2015 年度奨励賞受賞者に聞く 〇横畑 泰志<sup>1</sup>, 江成 広斗<sup>2</sup>, 亘 悠哉<sup>3</sup>, 梶 光一<sup>4</sup>

(<sup>1</sup>富山大学大学院理工学研究部, <sup>2</sup>山形大学農学部, <sup>3</sup>国立研究開発法人森林総合研究所野生動物研究領域, <sup>4</sup>東京農工大学)

特定鳥獣や外来種による農林業や生態系への被害の増加にみられるように、野生生物管理の重要性は日増しに大きくなっている。本学会においても様々な対応がとられているが、若手の中からこの分野をこれから指導的な立場で導いてくれそうな優秀な研究者が次々と現れているのは大変喜ばしい。

ところで、2015 年本学会大会は、国際野生動物管理学会議と合同開催になったため、例年のような奨励賞受賞者講演を行えなかった。二人の受賞者はいずれも野生生物管理の分野の専門家であり、国内外で高く評価され、地域社会にも貢献する優れた研究を続けておられる。そこで、本集会ではこのお二人のご講演をじっくりと拝聴し、例年の受賞者講演にはない質疑応答も行うことによって、これからの野生生物、特に野生哺乳類の管理について考えるひとつの機会としたい。特に、将来のこの分野を支える若い研究者や、その卵たちにとって励みになれば幸いである。

## 講演者1. 江成広斗氏(山形大学農学部)

「人口減少時代におけるニホンザルとの共存について考える:科学の役割と新たな展開」 講演者2. 亘 悠哉氏(国立研究開発法人森林総合研究所野生動物研究領域)

「衰退から回復へ: 奄美大島の在来種を救うマングース対策 (に便乗する研究)」 コメンテーター: 梶 光一 (東京農工大学、日本哺乳類学会理事長)

F-14

# 若手研究者による多様な研究紹介~将来を見据えた活発な交流をめざして~ OTAKASHI IKEDA<sup>1</sup>, YUKI MATSUMOTO<sup>2</sup>, KENTA UCHIDA<sup>3</sup> (「国土技術政策総合研究所、<sup>2</sup>総合研究大学院大学、<sup>3</sup>北海道大学)

これから研究に取り組む学生は、どのような切り口があるのか興味を持っている人も多い。また、研究を行っている人は、対象種以外でどのような研究が行われているかについて知りたいと思っている人も多い。しかし、これらの興味を若手研究者の中で紹介・議論し合う場は、本学会では比較的限られていた。そこで、本集会は将来の哺乳類学を担う発表者・参加者が、分野や対象種の垣根を超えた研究活動への発展を目指し、活発な交流の場を提供することを目的とする。

各発表者はそれぞれの経験を踏まえ、どのように研究をスタートし、どのような切り口から研究しているのかといった個々のバックグラウンドを紹介すると同時に、研究成果についても発表する。全員の発表終了後、発表者以外の研究内容を共有するために、ライトニングトークを実施する。

#### 「趣旨説明」池田敬

「ニホンジカのフィールド調査の経験を活かして~理想と現実~」池田敬

「野生動物を受容する地域社会の仕組みを考える―人文科学からの実践的アプローチ―」東城義則(総研大) 「昆虫から哺乳類へ?沖縄から北へ!南へ!」小林峻(琉大)

「都市は哺乳類研究の舞台となるか:リスをモデルに基礎から応用まで」内田健太

「礼文島とアザラシと、それからわたし」渋谷未央(東農大)

「ダニからアザラシまで~「見えない」動物をいかにして研究するか?~」水口大輔(水産機構・北水研) 「無人島生活から始まった研究者人生」松本悠貴

F-15

# 哺乳類の「食」を通じた他種への影響 OYAMATO TSUJI<sup>1</sup>, ATSUSHI NAKAMOTO<sup>2</sup> (「京都大学・霊長類研究所、<sup>2</sup>琉球大学・大学教育センター)

生態系を構成する動植物は、互いに関わりをもって生活している。被食・捕食の関係は代表的な種間関係だが、他にも種子散布など動物と植物の間でみられる関係や、ある動物が他種に食物を供給するという共生関係、そして寄生虫と宿主の関係などが知られている。さらに、動物の行動が間接的に植物の生育や多様性に影響を及ぼすこともある。これらの関係を調べれば、研究対象の生態系における役割が明確になる。ただ、哺乳類を対象とした野外調査の多くは、研究対象の行動だけに目を向けることが多く、ゆえに対象種がそれ以外の動植物に与える影響、逆に他の動植物から受ける影響について調べた事例は必ずしも多くない。本集会では、哺乳類を対象とした種間関係の事例について紹介してもらうともに、哺乳類と哺乳類、あるいは哺乳類と植物の関係についての研究の今後の課題について、集会参加者と話し合うことを目的とする。この集会を通じて『生態系を構成する一員としての哺乳類』という視点が多くの研究者に根付くことを期待している。

#### 話題提供者:

- ・奥田圭(福島大・環境放射能研):シカの「食」がもたらすもの
- ・田村典子(森林総研・多摩森林科学園):リスの「食」がもたらすもの
- ・辻大和 (京大・霊長研): サルの「食」がもたらすもの
- ・中本敦 (琉球大・大教セ):オオコウモリの「食」がもたらすもの

F-16

# 野ネズミの生態学—New approaches develop novel fields— 〇坂本 信介<sup>1</sup>, 島田 卓哉<sup>2</sup>, 齊藤 隆<sup>3</sup> (<sup>1</sup>宮崎大・農, <sup>2</sup>森林総研・東北, <sup>3</sup>北大・フィールド科学センター)

Elton 以来、野ネズミは生態学をはじめさまざまな基礎研究分野で研究対象となってきた。時代とともに、哺乳類の生態学の中心は保全対象の希少種や人間活動と軋轢関係にある動物へと移っていき、相対的に、野ネズミの生態研究は減っていった。しかし、多様な環境に生息し、植物と高次捕食者をつなぐ野ネズミの生態学的機能には普遍性があり、研究アプローチの発達が目覚ましい現在、基礎研究にもさまざまな展開が見込めるはずである。本集会では、日本の野ネズミの生態学の発展を期し、新しいアプローチを応用して、野ネズミの生態に新規性を見出した研究を若手研究者に講演いただく。

- ・江藤 毅 (新潟大・朱鷺・自然再生学研究センター) アカネズミの日内休眠-環境の変化に対する柔軟な体温調節能力-
- ・若林紘子(北大・環境科学院)、齊藤隆(北大・フィールド科学センター) マルチプルパタニティ頻度を用いた複数オス交尾頻度の推定-エゾヤチネズミを例に-
- ・柏木晴香、梶村 恒(名古屋大学大学院・生命農学研究科) 森林性ネズミの虫害堅果選好性-堅果の内部状態に対する反応を探る-
- ・佐藤 淳(福山大・生命工学) DNA バーコーディング法を用いたアカネズミの食性分析

F-17

# ビックデータ「モニタリングサイト 1000 里地調査」の可能性 ~全国の市民によるセンサーカメラ調査で何がわかるか~ 〇青木 雄司 「, 足立 高行 2, 安藤 元一 3

(1公益財団法人 神奈川県公園協会,2応用生態技術研究所,3ヤマザキ学園大学)

モニタリングサイト 1000 は、第 2 次生物多様性国家戦略に基づき、高山帯、森林・草原、里地、湖沼、湿原など多様な環境を対象に全国 1000 箇所で長期モニタリング調査を行い適切な自然環境保全施策に資することを目的とした環境省の事業である。そのうち、里地調査は植物や昆虫、鳥、哺乳類といった複数の分類群にわたる総合的な調査を、地域で活動する市民が主体となって約 200 ヶ所で調査を実施しており、哺乳類調査は市民でも簡便に扱うことができ証拠が残るセンサーカメラを使って約 50 ヶ所で調査を行っている。2008 年から全国調査が始まり、里地調査は 1500 人もの市民ボランティアによって 2014 年度までに 120 万件、哺乳類調査だけでも 14 万件のデータが得られている。調査の結果、この調査で初めてアライグマなどの外来種の生息状況が分り、市民・行政と協力して早期の駆除対策に繋げることができた。また、2014 年までに得られたデータを使って、全国的な変化傾向を解析・評価した結果、緩やかではあるものの里山の普通種であるノウサギの個体数が特に減少傾向にあることが明らかとなった。哺乳類調査データは環境省のウェブサイトでも公開されているが、ほとんどデータが活用されていない。全国的な里山の哺乳類のビックデータはどのような可能性があるか、そして哺乳類研究者とどのような関係を築くことができるのか、参加者と一緒に考えたい。

F-18

#### 骨盤!

〇福井 大<sup>1</sup>, 五十嵐 由里子<sup>2</sup>, 田島 木綿子<sup>3</sup>, 久世 濃子<sup>3,4</sup>, 森 健人<sup>3</sup>, 川田 伸一郎<sup>3</sup> (<sup>1</sup>東京大学, <sup>2</sup>日大松戸歯学部, <sup>3</sup>国立科学博物館, <sup>4</sup>日本学術振興会)

骨盤は、ロコモーション(推進力)の基盤として働く他にも、内臓や周囲軟部組織との関係に基づき妊娠・ 出産や排泄など重要な機能を果たす骨格である。哺乳類の骨盤については、一部の分類群では形態や機能が詳細に検討されている一方、情報が極めて限られている分類群もある。骨盤の形態や機能を理解することは、対象とする種の分類のみならず、生態や行動・進化を解き明かすための重要な手がかりや根拠となりうるであろう。本自由集会では、今まで形態学に縁が薄かった行動学や生態学の研究者が、形態学を学ぶことで研究を発展させることができると考え、その一例として様々な哺乳類分類群の骨盤の形態や機能について基礎から学ぶことを目的とする。様々な分類群の骨盤を扱う研究者から話題提供を行うが、聴衆からも、自身の研究に基づくコメントや質疑を気軽にいただければ幸いである。

#### 話題提供者(発表順は未定)

福井大 (東大北海道演習林)「企画経緯と趣旨」

森健人(国立科学博物館)「大腿骨頭靭帯の比較解剖学」

田島木綿子(国立科学博物館)「後肢を無くしたイルカたちから骨盤を考える」

川田伸一郎(国立科学博物館)「モグラの骨盤と分類」

五十嵐由里子(日大松戸歯学部)「ヒト骨盤の形態と骨盤上に残る妊娠出産の痕跡」

コメント

久世濃子(国立科学博物館・日本学術振興会)「生態学・行動学と形態学を結ぶ」